

医事・文談 九百六十四 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その252
子規周辺の人物と(二)

(姓名)	(死亡年月日)	(年齢)
(1) 天田愚庵	M・37	17
(2) 浅井 忠	M・40	16
(3) 陸 羯南	M・40	12
(4) 伊藤左千夫	T・2	7
(5) 長塚 節	T・4	2
(6) 夏目漱石	T・5	12
(7) 坂本四方	T・6	5
(8) 森 鷗外	T・11	7
(9) 内藤 鳴雪	T・11	10
(10) 石井露月	T・15	2
(11) 寺田寅日古	S・3	9
(12) 河東碧梧桐	S・10	12
(13) 五百木飄亭	S・12	2
(14) 中村 不折	S・18	6
(15) 下村 為山	S・24	6
(16) 佐藤紅緑	S・24	7
(17) 岡 斂	S・26	9
(18) 香取 秀真	S・29	1
(19) 寒川 岸骨	S・29	9
(20) 高浜 虚子	S・34	4

これらの人々は、大学を中退して社会に出てからの子規の周辺にあって、子規の文学革新運動に加わった人々である。いわば子規の成人後の周辺にあった人々である。そのいずれの人も、一流中の一流の人物であるのは特筆すべきことといわねばならぬ。

しかしこれらの人々との接触の前に、子規の系と出生、郷里の親戚と知友にも触れるのがあるであろう。

それは子規の資質と、上京までの環境と教育を見ることとなるのである。人は誰でも、先天の資質と、後天の環境と教育によることが多いのは言

うまでもない。

前にも書いたかもしれないが、ここで子規の出生から、上京までのことを記述することとする。重複はお許しを得たい。

子規(本名は常規、幼名は処之助のち升)は、慶応3年(一八六七)9月17日(陽暦10月14日)松山城下に生れた。父は正岡隼太常尚、母は八重(大原氏)である。

父は松山藩士、役は御馬廻加番から昇格し、御馬廻番人。維新後は一番平土上隊軸伍、当時35歳、母は藩の儒者、大原有恒(号・観山)の長女で時に23歳。

早逝した父について子規は書く。

我父にておはせし人は(略)、明治五年即ち余が六歳の時 四十歳を一期として空しくなり給ひしかば 余は少しもその性質挙動を知らず。只その大酒家なりしことは誰もいふ処にて 毎日毎日一升位の酒を傾け給ひ それが為に身体の衰弱を来し 終に世を早うし給へり。(略)

父は武術にもたけ給はず、さりとて学問とてもし給はざりし如く見ゆ。(略) 父は高慢にして強情に しかも意地わるきかたなりしと

(筆まかせ)明治22年

これによると子規の父は、学問・武芸共にひいでず、大酒家で意地わるい人物であつたらしい。俸禄も14石と下級藩士で、ごく平凡な人物であつたが、性質はやや偏っていたかと思われる。

常尚にとつて、八重との結婚は初婚ではない。このことは、講談社刊の「子規全集」(第二十二巻 年譜 資料)にも、増進会出版社刊「子規の一生」の年譜にも記載がある。

常尚は安政元年(一八五四)3月、倉根半蔵の娘(天保11年8月生)と結婚、安政5年、嫡子数馬が出生している。ところが妻は安政6年5月14日、20歳で死亡し、数馬も、文久2年(一八六二)2月22日、5歳で夭逝した。

常尚は妻子を失ってから、かなり長く独身を保ち、元治2年・慶応元年(一八六五)再婚した。時に常尚33歳、妻大原氏八重21歳であつた。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記
申込先：北海道医師会事業第二課
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233